企業名：　　中外製薬

1. **この会社が目指す姿が理解できるか**

まずは中外製薬が目指す姿について述べていこうと思う。
中外製薬は 2030 年にヘルスケア産業のトップイノベーターとなることを目指しており、その具体的な会社像として以下の 3 点を挙げている。

①世界の患者さんが期待する
世界最高水準の創薬力を有し、世界中の患者さんが「中外製薬なら必ず新たな治療法を生み出してくれる」と期待する会社

②世界の人材とプレーヤーを惹きつける
世界中の情熱ある人材を惹きつけ、ヘルスケアにかかわる世界中のプレーヤーが「中外製薬と組めば新しい何かを生み出せる」と想起する会社

③世界のロールモデル
事業活動を通じた ESG の取り組みが評価され、社会課題解決をリードする企業として世界のロールモデルである会社

患者、人材を惹きつけたい、世界最高水準の会社でありたいというのは製薬会社の目指す姿として十分に理解できるものである。

2. **この会社の競争優位性が理解できるか**

この会社の競争優位性として以下の 8 点が挙げられる。

研究	・バイオ、中分子といった独自の製薬技術 ・ロシュ・グループの持つ研究資源やインフラを共有する協働体制(大規模・高品質な化合物ライブラリ　ー、遺伝子・核酸のプラットフォームなど)
開発	・幅広い疾患領域における豊富な開発実績 ・独自の創薬技術を適用した新規分子の開発実績 ・革新的な自社創製品開発の高い成功確率 ・ロシュとのグローバル協働体制
製薬	・抗体医薬品の高度な生産技術と最先端設備の保有 ・グローバル査察・申請への対応実績 (「ヘムライブラ」「アレセンサ」「エンスプリング」)

	・ロシュ・グループで共有できる審査当局要求のタイ ムリーな把握と対応
マーケティング	・バイオ医薬品、個別化医療などスペシャリティ領域 におけるトッププレゼンス ・地域や顧客の特性に応じた高度なソリューション提 供体制やチーム医療支援、副作用データベースなど を活用した医薬安全性の活動
メディカルアフェアーズ	・豊富なエビデンス創出実績 ・ロシュや海外子会社とのグローバルな協働活動
医療安全性	・業界最先端の活動実績（データベースツール導入、 セイフティエキスパート設置など） ・ロシュ・グループ安全性部門との強固な連携体制 ・疫学・医療データ活用分野における業界活動の実績
信頼性保証	・電子署名システム確立や品質保証システムのデジタル化、販売情報提供活動の監視への AI 導入など、積 極的なデジタル技術活用 ・サプライチェーンも含めたグローバルレベルの品質 水準の維持・強化を達成した品質保証 ・デジタルトランスフォーメーションを加速するデジ タルコンプライアンス体制
知的財産	・技術特許出願ポートフォリオの拡充 ・製品特許の権利化の進展

どの優位性においてもライバル企業と差をつけるために必要なものであると理解できる。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

研究においては技術と協働体制について言及されている。これら 2 つは身に着ける、そして築くために時間がかかるものであり、なおかつ簡単には崩れない。よって、研究における競争優位性には持続性があると言える。

開発においては実績と成功確率、協働体制が言及されている。これらは過去からの積み上げによって確立されるものであり、ここに持続性があると言える。

製薬に関して、その技術と設備、対応実績などが言及されている。これらも中外製薬内で磨かれたものであるため、持続性があると理解できる。

マーケティングについては他会社との比較によって競争優位性が定まるので、一概に持続できるものだということは言えない。

メディカルアフェアーズにおいては実績やこれまでの活動が競争優位性として語られ

ている。これらもまた過去の積み重ねによって確立されたものであることから、持続性があると考えられる。

医薬安全性に関しても、実績や連携体制が競争優位性として挙げられているので、同じく持続性があるものとして考えられる。

信頼性保証について、積極的なデジタル技術の活用や品質の維持・強化、デジタルコンプライアンス体制が競争優位性として挙げられており、これらはいずれも中外製薬の中で確立されたものである。よってこれらは持続性のあるものと理解できる。

知的財産については、技術特許出願ポートフォリオの拡充、製品特許の権利化進展が挙げられており、いずれも中外製薬の財産が増えることに等しい。したがって、これらも持続性のあるものである。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

中外製薬は「トップイノベーターであること」を目指しており、最重要課題として「イノベーションの追求」を掲げている。その中で最も大切なのは「ひと」だと述べられている。中外製薬では社員のモチベーションを重要視しており、社員一人一人が主役となれるよう環境づくりに励んでいる。このような「ひと」を大切にする会社においては社員の人的資本の価値向上が達成されるのではないだろうか。

5. 報告書にはどのような改善余地があるか

製薬に関する専門用語が多々使われており、ややわかりにくい部分があった。用語の解説を加えるとより良い報告書となるのではないだろうか。